

きずな

2013年
(平成25年)

5

聴いていますか 子どもの声を

特集テーマ

子ども



5月15日

国際家族デー

各国が家族に関する問題について理解を深め、解決に向けての行動を促すことを目的に、1993(平成5)年、国連が毎年5月15日に制定しました。

2 データで見る子どもの人権課題

3 子どもの心に寄り添うことの大切さ

上田孝俊さん

(武庫川女子大学教育研究所准教授)

4 困難を乗り越える力

橋本明さん

(公益社団法人家庭養護促進協会事務局長)

5 児童養護施設で出会った「家族」を映画に
刀川和也さん(ジャーナリスト)

6 地域の多世代が関わる子育ての広場

NPO法人子育てサポート☆きらりing(加古川市)

7 少年院出院者の社会復帰を支える

NPO法人セカンドチャンス!大阪交流会

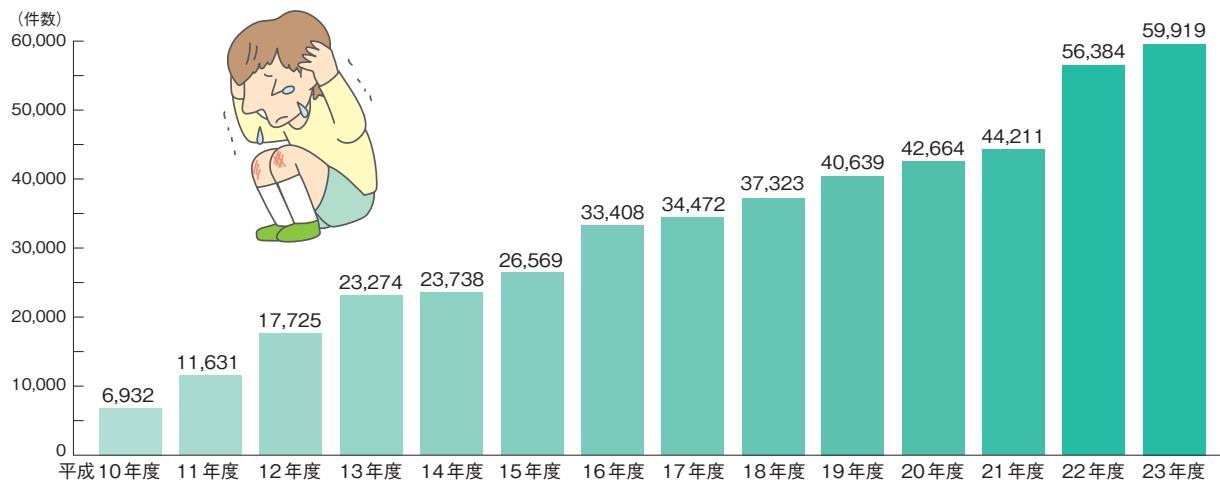
8 情報ぷらざ



児童虐待やいじめ、体罰など、子どもにまつわる人権課題は依然、深刻な状況にあります。それらを解決するためには、大人が日頃から子どもの心を理解し、地域や学校、家庭など社会全体で子どもを守り、育てていく姿勢が大切です。

データで見る 子どもの人権課題

児童相談所における 児童虐待に関する 相談対応件数の推移 (全国)



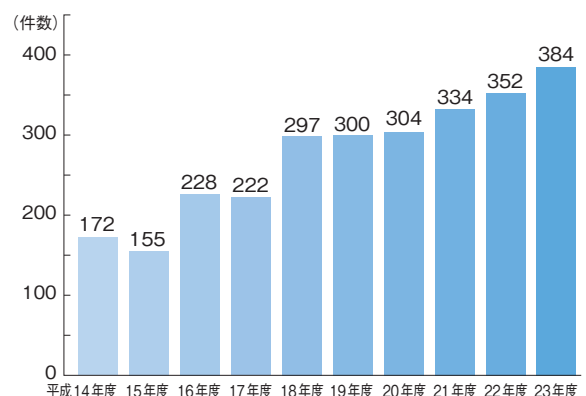
資料：厚生労働省「福祉行政報告例」（注）平成 22 年度は、東日本大震災の影響により、福島県を除いて集計した数値

児童相談所における 児童虐待に関する 相談の内容別件数 (全国)

区 分	件数 (平成 23 年度)
身体的虐待	21,942件 (36.6%)
保護の怠慢ないし拒否 (ネグレクト)	18,847件 (31.5%)
心理的虐待	17,670件 (29.5%)
性的虐待	1,460件 (2.4%)
総 数	59,919件 (100%)

資料：厚生労働省「福祉行政報告例」

児童虐待事件検挙件数の推移 (全国)



資料：警視庁調べ
(注)無理心中、出産直後の殺人及び遺棄を含まない

2011（平成 23）年度に全国の児童相談所が対応した虐待の相談件数は 5 万 9,919 件で、そのうち兵庫県内は 2,228 件に上ります。児童虐待に関する相談件数は年々増加しており、その内容は身体的虐待が最も多く、ネグレクト、心理的虐待が続きます。

乳児院や児童養護施設に入所する児童も増えており、2011（平成 23）年度は乳児院が約 3,000 人、児童養護施設が 2 万 9,744 人とどちらも過去最多でした。児童虐待事件の検挙件数も増加傾向にあるなど、さまざまな観点から子どもを取り巻く課題の深刻さがうかがえます。

メッセージ

子どもの心に寄り添うことの大切さ

上田 孝俊さん^{うえだ こうしゅん}（武庫川女子大学教育研究所准教授）



「だいたいようぶ」と言ってくれる 誰かの存在

転んだとき、小さな子どもたちは、痛くて泣きながらも周りの大人たちの顔をうかがっています。今、遭遇した出来事はどれほど痛々しいことなのか、周りの人の様子から判断しようというのです。けがをしていない限り、「だいたいようぶ。痛い痛い飛んでいけ」と笑顔で接すれば、子どもも「そうか」と安心し、涙をためながらも笑顔にもどります。フランスの思想家ルソーは、その著「エミール」のなかで、「私が冷静にかまえていれば、子どもはやがて冷静な態度をとりもどし、痛みがなくなれば、もうなおったものと考ええるだろう」と同じことを言っています。

2011（平成23）年3月11日の東日本大震災。石巻市の門脇小学校もひどい揺れにおそわれました。当時6年生だった女子児童は、1カ月後の担任の先生への手紙に、「近くにいたおばあさんの心配をして、頭にはようしやなく雪がふりかかり、それにもかかわらず、時々声をかけながら歩く先

生を見て、私は、『先生みたいな大人になれたらいいなあ』と思いました」と避難するときの心情をつづっています。

いじめや体罰、さらに震災・大津波という子どもたちの「こころ」の危機の場面で、困難をとみにしながら、しかも冷静に判断できる「誰か」が居てくれることが決定的に重要だということを感じます。同時に、大人にとっては危機的と映らない先に挙げたような日常的な「子どもにとっての危機」の場面で、寄り添ってくれる「誰か」が居てくれたことの積み上げが、大きな危機にぶつかったとき「誰か」とともに乗り越えられるという見通し、安心感をもたらすことになるのではないかと考えます。

子どもに寄り添う 「教育者」像の構築を



3世紀のエジプトの教育者クレメンスは、教師と教育者を区別して使い分けています。「教師」は今日の学校の教師像を描いていいと思います。そ

れに対して「教育者」は、子どもの日常生活に即して道徳性や生活の見通しを与える役割で、市民階級から信用された奴隷たちに任せられました。クレメンスは両者を別々の存在としています。子どもたちの成長・発達を支える役割を教師と教育者と考えるなら、教えることと寄り添うことを両立させなければならないと考えます。

今日の教師には、知識を確実に教え、子どもたちの能力を高めることが声高に要求されています。しかし、知識や道徳性は、子どもたちが教師に支えられながら自ら高めていくものです。失敗したり、徐々にできるようになったりしながら、見守られ、またその都度叱られ、でも「だいたいようぶ」と励まされ、成長を実感していく。そうした個々の子どもの発達可能性を信じ、寄り添い続ける人としての教師の役割が、再度、重視されなければならぬと考えます。

プロフィール 1955（昭和30）年滋賀県生まれ。武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科で、教員、看護師、心理士、福祉職などの社会人大学院生の研究指導を担当。31年間、滋賀県内の小中学校で教員を務め、2008（平成20）年から現職。専門は臨床教育学、生徒指導論、日本教育史。教師の困難性や悩みを語り合うセルフヘルプグループを開催している。学術博士（神戸大学）。

社会で子どもを守り育み、親を支援することについて、長年、里親探しなど社会的養護の課題に関わってきた家庭養護促進協会事務局長の橋本明さんにご寄稿いただきました。

困難を乗り越える力

橋本 明さん（公益社団法人家庭養護促進協会事務局長）

児童は、人として尊ばれる

児童は、社会の一員として重んぜられる

児童は、よい環境のなかで育てられる

これは1950（昭和25）年5月5日に制定された児童憲章の前文で、敗戦から立ち上がり、日本のこれから子どもたちを育てていく柱となる三つの理念を表現しています。各地域の里親会の総会では毎回この児童憲章をみんなで唱和しています。

20代の時、児童福祉施設で指導員として働いていた頃、親と暮らせない子どもたちの生活の厳しさに直面し、苦悩しましたが、あれから半世紀近く経って今の子どもたちの生活環境を考えると、児童憲章の理念からはますます遠ざかっていく現状に何ともやりきれない思いがします。今の子どもたちは半世紀前の子どもたちよりも果たして幸せになっているのだろうか、と時々考えます。

もう一つ気になるのは、ほかの国に比べて日本の子どもたちの自尊心の低さです。子どもたちが自分らしく生きるためには「困難を乗り越えていく力」を身につける必要があります。アメリカやイギリスでは「レジリエンス」と表現されていますが、困難や危機を越

えていく力の一つは、「自分が一人の人間として尊重され、信頼され、大切にされる」経験を積み重ね、自尊心を高めていくことです。

里親家庭で育つ子どもたちは、生みの親と暮らせないさまざまな事情にありますが、大人になった里子や養子たちの話を聴いていると、子どもの頃生みの親に対して怒りや憎しみの感情を持っていた子どもたちも、成長と共に自分を手放した生みの親を受け入れ、許し、そして親の幸せをも願うようになる人もいます。子どもの頃に精一杯里親や周囲の大人に愛され、大切に育てられた経験が、自分に与えられた人生を肯定し、自尊心を高めることにもなっています。ある43歳の養女は「子どもたちには、家庭は大事にしないさいよ。お母さんみたいに血がつながっていないなくても、こんな家族もあるのよ。っていつか話してやれるのを誇りに思っています」と語っています。里親や養親との血縁を超えた親子の関わりの中に、困難を乗り越えていく力となるいくつかのヒントがあるように思います。

プロフィール 1943（昭和18）年神戸市生まれ。1966（昭和41）年に慶應義塾大学を卒業後、神戸で児童福祉施設の建設に関わり、児童指導員として勤務。アメリカやヨーロッパの福祉施設などでも研修を受けた。1975（昭和50）年、里親探しの活動を開始。兵庫県社会福祉審議会児童福祉専門分科会里親部会委員。



じんけんガイド

児童虐待の通告や相談にいつでも応じます



「こども家庭センター」では、子どもと家庭のさまざまな問題について相談援助活動に取り組んでいます。夜間や休日などの緊急性の高い児童虐待などに関する通告や相談には、右記の「児童虐待防止 24 時間ホットライン」を開設しています。

■ 兵庫県

中央こども家庭センター	TEL 078 (921) 9119
西宮こども家庭センター	TEL 0798 (74) 9119
川西こども家庭センター	TEL 072 (759) 7799
姫路こども家庭センター	TEL 079 (294) 9119
豊岡こども家庭センター	TEL 0796 (22) 9119

■ 神戸市

神戸市こども家庭センター	TEL 078 (382) 2525（平日 8:45～17:30）
神戸市児童虐待夜間休日相談	TEL 078 (382) 1900（上記以外）

この人に
聞く！

児童養護施設で出会った「家族」を映画に

刀川 和也さん（ジャーナリスト）

児童養護施設の子どもたちと彼らの親代わりである保育士の日常を8年かけて追ったドキュメンタリー映画「隣る人」。監督を務めたジャーナリストの刀川和也さんに制作の動機や作品を見た人へのメッセージなどをうかがいました。



Q 「隣る人」の意味は。

撮影にご協力いただいた埼玉県の児童養護施設「光の子どもの家」の理事長、菅原哲男さんの造語です。「どんなことがあっても、いつもそばにいるよ」という思いが込められています。

Q なぜ、この作品を撮ろうと。

児童虐待をはじめ、子どもたちが巻き込まれる悲惨な事件が多い中、大人や家族の役割について見つめ直したいと考えたのがきっかけです。

Q 児童養護施設での撮影は

難しいこともあったのでは。

光の子どもの家には敷地内の3棟のほか、地域にも2軒のグループホームがあります。1人の保育士が5人程の子どもを担当していて、寝食を共にしています。その暮らしの中にある「日常の些細な関わりの中」にこそ、大切なものがいっぱい詰まっているのだということを撮影にかけた8年間でようやく感じ取ることができるようになりました。

Q これまでに全国各地で3万人が

見たそうですが、どんな感想が寄せられていますか。

保育士と子どもの絆の強さに涙を流す方もいますが、それは子どもの境遇がかわいそうに思う気持ちからではないような気がします。自分は子どものころに親から強く抱きしめられたか、今自分の子どもを強く抱きしめているかと、自分自身を投影することと涙があふれ出るのだと思います。

Q この作品で一番伝えたいことは。

子どもたちにとっては毎日が事件の連続であり発見です。その事件と発見の瞬間に、大人はどれほど気付き、共感し、寄り添っているでしょうか。私は撮影を通して、子どもには時間を共有し伴走してくれる大人が絶対に必要だと感じました。保育士と子どもの姿から「家族とは何か」を考えるきっかけになればうれしいですね。



作品の1シーンより

「隣る人」の上映予定などについては公式ホームページへ。

隣る人

検索



地域の多世代が関わる子育ての広場

NPO法人子育てサポート☆きらりing（加古川市）



シニアボランティアと子どもたちが一緒に遊ぶ「オープンルーム」



高校生、大学生が対象の子育て学習講座「わくわく子育てカレッジ」の様子

NPO法人子育てサポート☆きらりing

●東加古川子育てプラザ

加古川市平岡町新在家 1588-22

TEL 079 (423) 5517

●加古川駅南子育てプラザ

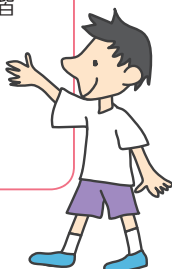
加古川市加古川町寺家町 45 JAビル 5 階

TEL 079 (454) 4189

✉ kosodatekiraring@bb.banban.jp

きらりing

検索



「NPO法人子育てサポート☆きらりing」は加古川市から委託を受け、市内2カ所で「子育てプラザ」を運営しています。子育てプラザでは乳幼児と保護者が交流を深める「ふれあいオープンルーム」や親子体操教室、季節のイベントなどを開催するほか、地域の子育て自主サークルの育成や支援にも力を入れています。

スタッフはすべて女性で、その大半はかつてのプラザ利用者です。「子育てが一段落つき、これまでの経験を生かして若い母親の相談に乗ったりしています」と代表の石堂美紀代さんは話します。

プラザでは子育て中の親だけでなく、幅広い世代が子どもと接する機会を設けています。時のプレゼント事業は、子育て中の母親にリフレッシュしてもらおうと、昼間の数時間、母親に代わって保育士などをめざしている高校生たちが面倒を見るといふもの。「子どもを預けた母親から『学生さんの一生懸命な姿を見て、私も子育てをもっと頑張らないかと思いました』といった声をいただくこともあります」と石堂さん。一方、高校生からは「責任をもって子どもを見守ることの大切さを知った」「将来の具体的なビジョンが見えてきた」などの感想が寄せられています。

シニア向けには専門家を講師に招いての子育て大学を開講。修了生はプラザにやってくる子どもたち相手に手遊びをしたり、絵本の読み聞かせをしたりしています。

「最近ではプラザを利用する中国人のお母さん同士がサークルを立ち上げるなど、交流の輪が広がっています。また、イベント時には地元商店街が協力したいと声を掛けてくださいます」と石堂さん。子育てプラザはまちの活性化にも一役買っています。

少年院出院者の社会復帰を支える

NPO法人セカンドチャンス！大阪交流会

少年院の出院者は年間約4000人。多くの若者たちが立ち直る一方、約15%は出院後5年以内に再入院しています。少年院を出院して更生した人たちが運営する「NPO法人セカンドチャンス！」は、全国10カ所に拠点を設け、出院者の社会復帰を支援しています。

活動の柱は少年院での講演と隔月で開催する交流会。交流会は出院者が現在の心境や悩みを語り合い、社会からの孤立を防ぐのが目的で、弁護士や元裁判官、臨床心理士などもサポーターとして参加しています。

「スタッフの中には、かつてセカンドチャンス！に支えてもらった人もいます」

大阪交流会の代表、野田詠氏（よじ）さんはセカンドチャンス！に参加する以前から、若者の更生を支援する施設を運営していました。「出院後、社会になじめずに孤立感を深め、再び罪を犯す人もいます。しかし、周囲が当事者に対して信頼する姿勢を見せ、立ち直るきっかけを与えれば、彼らは過去の人間関係のしがらみや誘惑に力強

く立ち向かうことができます。そのためには居場所が必要なのです」と語ります。

出院後、せっかく就職しても「職場の同僚からどんな目で見られているのか」と常に不安にかられ、ついには仕事を辞める人もいます。

「当事者の気持ちに寄り添うことが、彼らにとって一番の励みになります」と野田さん。

セカンドチャンス！の発足は2009（平成21）年。活動の輪が広まるにつれて、過ちから立ち直り社会へ旅立つ若者は増えていきます。



大阪交流会の代表、野田さん（左から3人目）。セカンドチャンス！の仲間と共にアメリカで更生支援について学んだ時の一枚

NPO法人セカンドチャンス！

大阪交流会

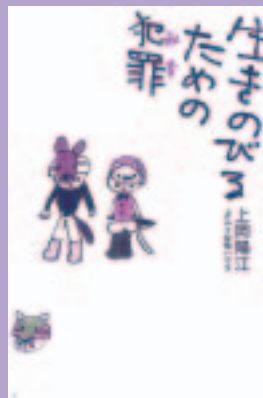
TEL 080 (3782) 8778

✉ tumm85734@leto.eonet.ne.jp

公式ブログ セカンドチャンス！ ブログ

検索

まず、な、フイブフリー
〜おススメの一冊〜



生きのびるための犯罪

上岡陽江+ダルフ女性ハウス著

(文芸社)

著者は小児ぜんそくの処方薬依存や摂食障害、アルコール依存症から立ち直った経験を生かし、現在、薬物やアルコール依存症の女性をサポートする「ダルフ女性ハウス」を運営しています。彼女たちはDVや性的虐待、言葉の暴力、ネグレクトなどをきっかけに自暴自棄となり、心身の痛みやPTSDから逃れるために市販薬やアルコール、覚せい剤などに依存するようになりました。困難な状況から何とか生き延びようとした行いが、結果として犯罪に結び付くことも少なくありません。当事者たちの心の痛みを理解してほしいという著者の切なる思いが伝わってきます。



子どもが発するSOSをキャッチし問題解決に導く

子どもの人権110番

いじめや不登校、虐待など、子どもをめぐる人権問題は周囲の目につきにくいところで起きていることが多く、また、被害者である子ども自身に被害を外部に訴えられる力が備わっていなかったり、身近に相談できる大人がいなかったりする場合が少なく

ありません。「子どもの人権110番」は子どもの人権問題に対応する専用ダイヤルです。子どもはもちろん、大人も利用できます。

☎ 0120-007-110 (全国共通・無料)

●受付時間／平日8:30～17:15 ※IP電話からは接続できません

最寄りの法務局か地方方法務局につながり、法務局職員または人権擁護委員が対応。秘密は厳守します。法務省のホームページでも相談を受け付けています。

詳しくは



イベントガイド

兵庫県児童養護乳児院連盟 平成25年度 「おい集まれ! こいのぼりのつどい」	●日時／5月18日(土)11:00～15:00 ※要申し込み ●場所／明石公園西芝生広場 ※JR・山陽電鉄「明石」駅から徒歩約5分 ●内容／県児童養護連絡協議会、乳児院の児童や保護者、施設職員、児童福祉関係者等が一堂に会し、社会的養護における児童の健全育成をアピール。地域子育て支援に関する情報を発信し、児童福祉理念の一層の啓発を行う ●問い合わせ／県児童養護乳児院連盟事務局 TEL 078(855)5915
小野市 人権教育研究協議会総会	●日時／5月14日(火)19:00～ ※要申し込み ●場所／小野市伝統産業会館 ※神戸電鉄「小野」駅から徒歩約15分 ●内容／総会(一般参加可)、いじめ等防止条例の紹介、朗読劇 ●問い合わせ／小野市市民安全部ヒューマンライフグループ人権啓発推進グループ TEL 0794(63)1243
三田市 同和教育研究協議会研修会	●日時／5月18日(土)13:00～ ※要申し込み ●場所／三田市総合福祉保健センター ※JR・神戸電鉄「三田」駅から神姫バス「福祉保健センター」下車すぐ ●内容／講演「だから生きるんだ～元暴走族を立ち直らせたものとは～」具志アンデルソン 飛雄馬さん(多文化共生NPO世界人理事長) ●問い合わせ／三田市人権推進課(三田市同和教育研究協議会事務局) TEL 079(559)5081

ハーフ タイム

読者の皆さんは「スクールソーシャルワーク (SSW)」をご存じですか。子どもたちが日々の生活の中で出会うさまざまな困難について、子どもの側に立って解決するためのサポートシステムを指します。子どもが不登校になったり、問題行為を起こしたりする背景には、周囲には見えにくい要因が存在することがあります。さまざまな役割や立場の大人たちが、子どもの視線で一緒に考えることが問題解決に向けた第一歩ではないでしょうか。